

17・18世紀の台湾東海岸における族群関係の歴史的展開

——トルビアワン人を中心に——¹⁾

清水 純

I. はじめに

17世紀、オランダは、オランダ東インド会社を通じて台湾を支配下に置き、統治機構を築いて住民の統治を進めた。その過程で、原住民社会に関する様々な記録を残した。オランダの支配領域は主に台湾の西側の平地帯を中心とする地域であり、東海岸の全域にまでは十分に及ばなかったものの、彼らの残した遠征や探検などの記録や報告を通じて、当時の東海岸の状況を断片的ながら垣間見ることが出来る。オランダ東インド会社の手書きの文書類のうち台湾原住民に関連するものは、近年ライデン大学の研究者たちによって集成され、活字化され、英訳が付されて幅広い研究への利用が可能になった [Blussé & Everts 1999, 2000, 2006, 2010]。本稿ではこのオランダ史料をもとに、金を産出するとされた東海岸のタラボアンと呼ばれた村と、この村に居住していたトルビアワン人に焦点を当て、その周辺に展開された族群関係の再構成を試みる。さらに、先行研究において議論されてきた18世紀における民族移動との関連を視野に入れることにより、17・18世紀を通じた東海岸北部地域における族群関係史の見通しを示したいと思う。筆者の最終的な関心は、この地域の原住民各集団の相互関係と民族消長の歴史を解明することにある。本稿ではその第一歩として、まずこの地域で活動していた人々の大まかな族群関係の輪郭を描き出すことを試みることにする。

II. トルビアワン人の歴史と言語

1. トルビアワン人とクヴァラン人

トルビアワン人について語るには、まずクヴァラン人について述べておかなければならない。なぜならトルビアワンという民族集団はすでに消滅しており、現在トルビアワン人の子孫という意識を持つ人々は、たいていの場合、混血のクヴァラン人でもあるからである。

¹⁾ 本稿は2016年5月に廈門大学で開催された「台湾原住民の族群関係の歴史、現状、未来」国際シンポジウムにおいて発表した内容に基づいている。発表内容は、「17-18世紀の台湾哆嘍美远族族群关系」（清水純著・朱鵬訳）として『廈門大学学报（哲学社会科学版）』（2017年第一期 pp.79-88）に掲載されている。本稿は、その後明らかになった事柄を一部追加し、若干の修正と変更を加えた内容となっている。

「噶瑪蘭族（クヴァラン族またはカバラン族）」が行政院において公式の「原住民族」として認定されたのは2002年のことであった。台湾原住民はこれまで20以上の民族が学術的に分類されているが、そのうち漢化の進んだエスニック・グループは国家の定める「原住民族」には認定されてこなかった。クヴァランはそのようなグループの1つであった。スペイン人とそれに続くオランダ人が台湾に拠点を置いていた17世紀初頭には、彼らはまだ台湾東部の宜蘭平原に散らばって40余りの村を形成していた。その後、宜蘭平原では、18世紀後半に漢人入植者の流入が激増し、クヴァラン人は次第に土地を手放して原住地を離れた。海路南下して花蓮港郊外に加礼宛社を建てたクヴァラン人は、さらに入植してきた漢人と対立して武力抗争を起し（1878年）、清軍の武力によって鎮圧されたのち海岸地帯をさらに南下分散して今日に至っている。彼らの多くが花蓮県豊浜郷新社村を中心とした海岸地域に散在しているのは19世紀末以降の南遷の結果である。（図1参照）

ところで、クヴァラン人のなかには本稿で取り上げようとしているトルビアワン人を祖先に持つ人たちがおり、新社村ではこれらの混血の人々は「トロブアン（ToRbuan）²⁾」を自称している。馬淵東一の民族分類では、族名として「トルビアワン」という名称がつけられ、これは、清朝時代に存在した^{トルビアワン}哆囉美遠という社名（村名）に由来するものである。清朝時代における南下と移住の過程で、哆囉美遠社のトルビアワン人は常にクヴァラン人とともに行動していた。その結果、クヴァラン人との通婚も増加し、言語も生活習慣も同化して、今日では彼らの族群のアイデンティティは、固有の祖先祭祀の行事とともに混血のクヴァラン人のなかに残るだけとなっているのである [清水 2004: 21-22]。

ところで、クヴァラン語とトルビアワン語は、オーストロネシア語系の台湾原住民諸語の中では系統の異なる言語に分類される。言語学の分類ではトルビアワン語は、北部のバサイ語の下位グループのひとつに属し、バサイ・プロパー、トルビアワン、リナウ・カウカウの3つの言語グループに分けられている [Tsuchida 1980: 30]。一方、民族集団としてのトルビアワンは、馬淵東一の分類に基づくと、漢化の進んだ平埔族に大別される10種のエスニック・グループのうちの広義のバサイ族に含まれる。馬淵は、平埔族に含まれる原住民に関しては、文化的特徴を示すデータが乏しいことから主として言語学の分類に準じて民族分類を行っており、広義のバサイ族をさらに三つの下位グループ（バサイ、リナウ、トルビアワン）に分けている [馬淵 1974: 508]。このうちトルビアワンに該当するのが、新社村でトロブアンと呼ばれる人々である。日本統治時代には、宜蘭平原の哆囉美遠社のあった場所は、行政区分としては「台北州宜蘭郡大福庄社頭」となった。現在、新社村に居住する混血のトルビアワン人は、社頭すなわち旧哆囉美遠社からの移住者の子孫なのである。

2. トルビアワン人とバサイ人

バサイ語系の言語を話す人々は、台湾本島北端部から東北部にかけての地域に分布し、このうちの一部であるトロブアン人は17世紀初めにはすでに宜蘭平原の海岸に哆囉美遠社を建てていた。さらに

²⁾ Rは有声口蓋垂摩擦音

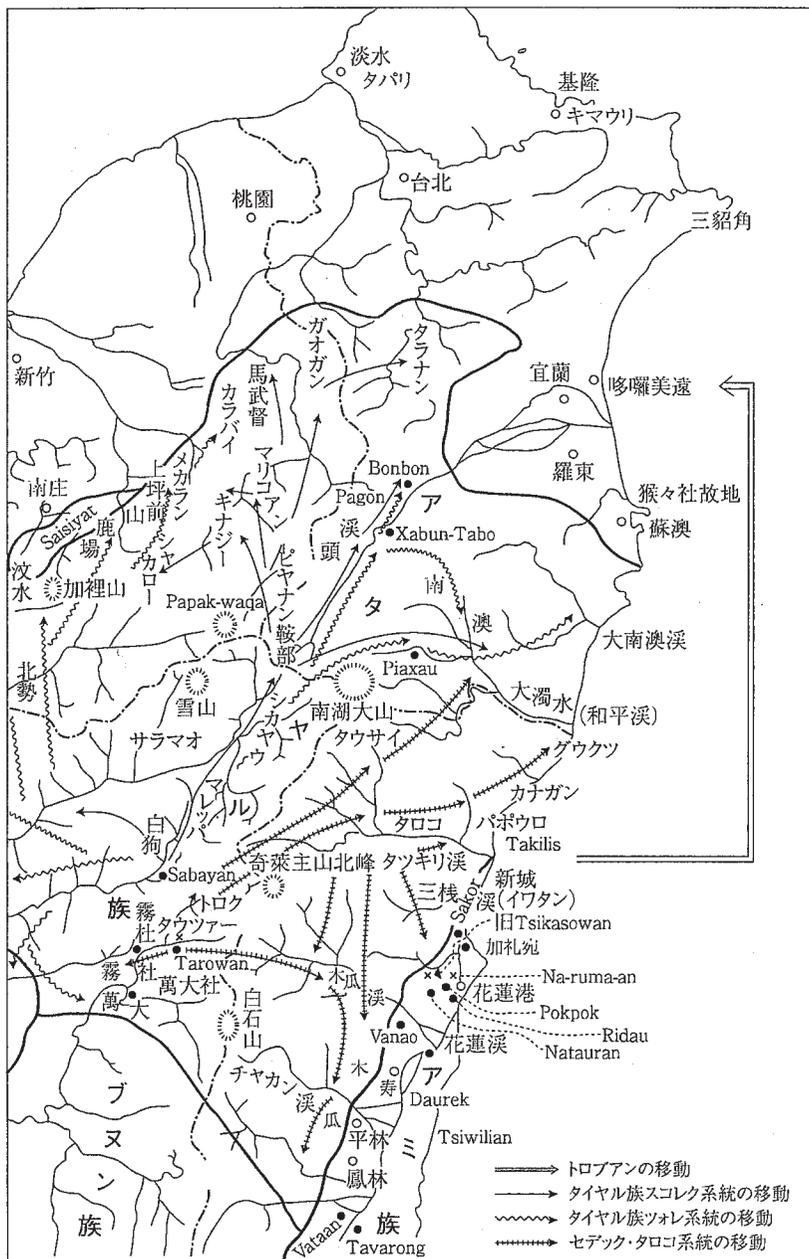


図1 18世紀後半におけるタイヤル、セデック、タロコの移動とトロボアンの宜蘭移住
「高砂族の移動および分布（第一部）」掲載図 [馬淵 1974：284] および「オランダ人の台湾探金事業」掲載図 [中村 1991：196] に基づいて作成

南のタツキリ溪付近には、タラボアン（トロボアン、テラボアンなど）という名称の村落を形成していた。

タラボアン村の住民（以下、タラボアン人とする）は、18世紀後半頃になるとタロコ人の攻撃を逃

れて北上し、宜蘭平原の哆囉美遠社に移住したと伝えられている。それまでの間、彼らはタツキリ溪付近で採れる金を主要な取引材料のひとつとして、キマウリ（Quimauri; 金包里）のバサイ人（以下、キマウリ人とする）や宜蘭平原のクヴァラン（カバラン）人とも交易を行っていた。なかでも特に、キマウリ人は、中国人から仕入れた豊富な品を携え、船で宜蘭を経由してタツキリ溪のタラボアンまで毎年往復して交易をおこなっていた [村上 1972: 283]。バサイ語を話すキマウリ人は、タラボアンのトルビアワン人と言葉が通じたので、交易において支障はなかった。

また、バサイ系の人たちの船を用いた交易活動は、他の原住民に比べると行動半径の格段の広さが特徴的であった。キマウリなど基隆周辺のバサイ人の村々をはじめ、宜蘭の哆囉美遠社や、タツキリ溪河口のタラボアンなど、彼らと同じバサイ系の言語が話されていた沿岸の飛び地のような村々は、彼らの歴史上の活動領域の各地につくられた海洋交易ルートの拠点的形成していたと考えられる。

ところで、清朝時代の哆囉美遠社にあたる村のことであると思われる記述が、1657年のオランダ東インド会社の次のような報告にみられる。

タラビアワン（Talabiawan）の村は砂丘の後ろの竹の茂った細長い窪地にある。タラビアワン人はふつう製塩と同時に商売をして生計を立てており、いくつかの物品を他のものと絶え間なく交換している。この村はカバラン湾岸の最も有望な場所に位置しており、だれもカバランやタラボアンに行くのにその場所を通り過ぎないわけにはいかない。彼らの村の前に位置する砂丘からタラビアワン人にはそれが見えるのである。村の片側にはカバラン河があり、我々はその向こうのどこかへ行くにはこの河を遡らなければならないのである。かれらが、米と交換にカンガン布その他の品物を会社から手に入れることができれば、彼らにとっても都合がよいはずである。彼らは会社から品物を仕入れてカバランの他の村に売ることができるであろうから、それを理由に我々の会社の駐在員を常駐させることができるだろう。 [Blussé & Everts 2010: 295].

この村は、あたかも、カバラン湾岸全体にとってのマーケットプレイス（市場）であるかのようだ。この住民は、体格と服装がキマウリ人にとってもよく似ていて、彼らは生活費を製塩によって稼ぎ、さらに米と毛皮の交易も行っている。これらの交易品は彼らが他の村で買ったり、売するために彼らのところに運ばれてきたりするのである [Blussé & Everts 2010: 361].

これらの記録は、タラボアン探検に出かけた助手のバルビヤーンによる報告がもとになっている。ここでは村と住民は Talabiawan と記されている。カバラン湾岸とは宜蘭平原の湾岸地域及びそのあたりにあった村々を指す。この報告によれば、17世紀のトルビアワン人は製塩業と商業によって生計を立てていた。宜蘭平原のトルビアワン人は、バサイ人に体格や服装がよく似て、同じように交易にたけた人々であった。そして、オランダ東インド会社は、商取引の拠点としてトルビアワンの村に会社の駐在員を置くべく、好位置に立地するトルビアワン村に注目していたのである。（図2参照）

III. タツキリ溪河口のタラボアン

1. バサイ人とタラボアン人の砂金交易

トルビアワン人に関して書かれた記録は、スペインとオランダが台湾北部を占領した時代にさかのぼる。この時期、タツキリ溪河口付近に住んでいたトルビアワン人の祖先によって砂金の採取と加工が行われていたことが知られている。スペイン人もオランダ人も、砂金の採れる場所がどこにあるのかに強い関心を持っていたことから、トルビアワン人の祖先についての記述は、スペイン人・オランダ人の金鉱探索に関する報告書の中に残されている。以下にその断片的な記述を拾いながら、トルビアワン人の祖先の歴史と族群関係を振り返ってみたい。

ところで、登場する地名や民族的呼称については、スペイン語文献、オランダ語文献の違いによるばかりでなく、それぞれの文書の書き手によって、また文脈によっても綴り方が異なっており、統一が難しい³⁾。しかし同じ人々を表しているものと考えられるため、以下の引用では一般的な名称を用いつつも、紛らわしい場合にはそれぞれの文書の書き方をかっこ内に記している。

スペイン人の記録のうち、1632年のドミニコ会士エスキヴェル神父による「台湾島に関する出来事の記録」によれば、台湾東海岸のトゥロボアン（Turoboan）という村は多くの金鉱を有し、北部のタパリ人（Tapari）たちは、たくさんの黄金を集めてそれを中国人に売り、石の硬貨や首飾りを手に入れている [Borao 2001: 163] とある。

また、エスキヴェル神父は同じ報告の中で宜蘭平原にある36か村の名前を列挙しているが、その中にはQuitlabiawan (Kitala-biauan) という村の名前があり [Borao 2001: 164-165]、これが清朝時代の記録では宜蘭平原沿岸部にあった哆囉美遠社と同じ村落を指すものと思われる。

一方、エスキヴェルによると、金鉱のある場所の中で原住民の間で最も知られているのは産出量の豊富なトゥロボアン（Turoboan）であるという [Borao 2001: 165]。

オランダ東インド会社も台湾統治を始めた当初から、金鉱を捜すことを目的の一つとしており、東海岸への遠征の途中に産金地への接近を試みたがなかなか実現しなかった。1642年の記録に、スペイン人ドミンゴ・アギラールへの訊問がある。彼はタラボアンへ行ったことがあると述べており、会社は、この人物から産金地タラボアンについての詳しい情報を聞き出そうとしたのであった。アギラールは、タラボアンに行けば金の鉱床が見つかるだろうと述べており、それは山から海への浸食によるもので、金は海水が反流と出会うあたりで見つけることができ、砂とともに掘り出して容器に入れて繰り返すすぐと鉱物が底に残ると述べている。また、タラボアンへ行くルートについても細かく説明しているが、海路でいくことを薦めている。陸路の方は険しく、断崖絶壁で非常に危険であり、しかも敵意ある原住民が通ることを許さないと語っている。彼自身は、セントローレンス湾（蘇澳）までは陸路をゆき、そ

³⁾ スペイン語、オランダ語の記録には Turoboan, Torrobouan, Taraboa, Tarraboa, Tarraboangh, Terraboa などの表記があり、綴りは一定していない。漢字表記では哆囉滿。以下の本文ではカタカナでタラボアンと表記する。

1643年3月9日付のオランダ東インド会社の記録のなかには、日本人クサエモン（Quesaymon）⁴⁾に対する訊問の報告がある。この日本人は、かつて乗っていた船が台湾の海岸で座礁して仲間が原住民に殺されたため、そのままキマウリの女性と結婚して現地に住んで30年近くになっていた。彼は洗礼を受けており、当時62歳だったとされる〔翁佳音 1995: 110-113, 中村 1949: 308〕。東インド会社側は、金鉱のある場所について探るため、彼に対して細かい質問を繰り返している。クサエモンの話から明らかになった村の所在及び他の族群との関係はおおよそ次のようであった；

金が産出する場所はタラボアンと呼ばれ、晴れて風があるときにはキマウリから1日の航海で行ける。ただし天気が良い時に船で行けるだけである。船も大きいものが必要である。1年のうちで、そこへ行くのに一番適しているのは、南の季節風が吹く3月頃から5、6、7月、その他の時期はそこへ行く方法はない。

自分はそこへ行ったことが5、6回あり、今年も一度行った。タラボアンの言葉もわかる。そこで見たことがある金は、少量の砂金である。そこの居民は魚の塩漬けや、生魚、模様の布、醤油、銅製の腕輪を（キマウリ人から）手に入れる。これらの商品は基隆の漢人がキマウリ人に売り渡したものであり、キマウリ人は（それを持って）船で海岸に沿ってその地へ到達し、彼らと交易を行う。陸路でそこに到達する道はない。最初は1レアルの金を銀4レアルで買ったが、その後は5レアルの銀で買った。のちには漢人の需要が切実になったため、値上がりして銀6～6.5レアルまでになった。〔中村 1949: 308-309, 翁佳音 1995: 110-113〕

クサエモンの話によれば、基隆の近くにあった金包里に住むバサイ人（キマウリ人）が船でタラボアンを訪れ、交易を行って砂金を手に入れ、それを基隆の漢人商人が買い付けるという関係があった。キマウリ人はまた、漢人商人から手に入れた商品をタラボアン人に売っていた。台湾北部のオランダ人の拠点である基隆から東海岸のタツキリ溪までは、陸路では簡単には到達できず、海路しかなかったことがこの質疑応答の中でも明らかになっている。しかも比較的大型の頑丈な船で行く必要があり、また、季節風に頼るしかないため、1年のうちの一定の時期にしか往来ができなかったのである。

これらの文献中にあらわれるトゥロボアンあるいはタラボアンは、これまでの考古学的な発掘調査の進展により、花蓮のタツキリ溪河口左岸の崇徳付近に存在した村のことであると考えられている〔劉 2007: 16〕⁵⁾。

4) 中村孝志は、喜左衛門、九左衛門などの字をあてている。

5) タツキリ河口付近からの金や金製品の出土は日本統治時代からあり、『南方土俗』（2-1: 101, 4-3: 55）彙報にも出土品に関する短い報告がある。近年のタツキリ溪河口北岸の崇徳およびタロコ溪谷における考古学的な発掘調査は、劉益昌を中心に進められており、報告も刊行されつつある〔劉 2007, 2009〕。

2. タラボアンの住民との交易に関する情報

さらに、1643年の記録によれば、オランダ東インド会社は東海岸にピーテル・ボーン (Pieter Boon) 大尉率いる探検隊を派遣し、産金地タラボアンに到達し、新たな情報を得た。タラボアンの首長らはボーンに対して和平友好の意を示し、会社員若干名がこの地に駐在して調査することを勧めた。ここで得られた情報は、タラボアンの位置が大体判明したこと、八月の豪雨の後、川辺に金の粒を産出することなどであった [中村 1991: 194-195]。

『バタヴィア城日誌』 [村上・中村 1972] は、台湾からバタヴィア総督府に送られた記録の抄訳であるが、1644年の記録にタラボアンとその住民についての情報が記され、黄金に関することと並んでタラボアン人が彼らを取り巻く原住民諸グループとどのような関係にあったかの記述が見える。これは、会社に協力していたキマウリのバサイ人の首長テオドーレ (Theodore) から収集したと思われる情報である。以下に族群関係についての要点を示す。

- ・金包里のバサイ人は毎年タラボアンで金の取引をしている。
- ・三貂角や宜蘭平原の住民も同じように黄金を求めているが、キマウリ人のように海外との交易品による鉄鍋や布その他の中国雑貨を手に入れる機会が少ないので、キマウリの方が金の交換では優位に立っている。
- ・タラボアンには4、5、6月の間にほぼ1回しか旅行することができない。その際商人は内地に入り込んで輸入品を売ることはない。
- ・タラボアン人はスペイン人または中国人に交易をすることを許可したことはない。
- ・これに対してキマウリ人は昔から彼らと交易をし、その交換して得た黄金は、雑貨と引き換えに中国人に渡していた。 [村上 1972: 283]。

これらの情報から、中国人との交易によって海外からの珍しい雑貨を手に入れることができたキマウリ人が、タラボアンの住民との取引を優位に行っていたことがわかる。また、タラボアン人の商売は主にキマウリ人経由であり、スペイン人や中国人と直接交換したことはなかった。一方のキマウリ人は、タラボアンでとれる金を手に入れて海外からの商品を買っていたのである。それでも、内地（この場合どこを指すのか不明瞭。）に入らずに短期間で取引を済ませるといった関係であった。

1645年、オランダ東インド会社は、上級商務員コルネリス・セザール (Cornelis Caesar) の一行443名を東海岸の遠征と金鉱探索に送り出した。隊は12月にタラボアン近くに到着したところ、タラボアンの長老が贈り物を持ってやってきた。セザールは少数の兵士たちとともに金が産出されるという川を遡って金鉱探索を試みたが、険しい峡谷や滝に阻まれて途中で引き返した。セザールらは、タラボアンの住民に金の供出を要求したが、彼らは応じず、翌年の供出を約束したのみで、セザールらは多くの金を得られずに帰着した [中村 1991: 198]。

1646年、上級商務員ハッパルト (Gabriël Happart) は、会社の命令でタラボアンに派遣していた現地人通訳テオドーレ、フィスカル (Fiscal)、日本人のクサエモン、そしてルカス・キラス (Lucas Kilas) らが基隆に戻ってくると、彼らから情報を集めた。それによると、毎年、タラボアン人は宜蘭

平原に航海し、宜蘭平原の人々はタラボアンに航海して、お互いに物々交換を行っている。通例としてタラボアン村の人々は彼らの砂金を、スペインの銀、大きな鉄鍋、中国の鉄と交換している。上述の村は基隆と宜蘭平原の人々にはタラボアンとして知られているが、(3種類の別の言語を話す別の人々をふくむ)その地の住民たちは、これを、Torrobouan (トロバウアンまたはトロブアン)、Pabanangh (パバナン)、Dadangh (ダダン)とも呼んでいる。タラロマ人(アミ)やその近隣の人々はこの村のことをタキリス(Tackilis)と呼んでいる。タキリスは60～70戸からなり、キマウリ人と同じバサイ語を話す。[Blussé & Everts 2006: 74-75].

タッキリ溪の河口付近に住んで砂金を採取しているのは3種の異なる言語を話す人々の集団であること、南のアミ族のタラロマ人たちからはタキリスという名称で呼ばれていることがこの情報で明らかになった。トロブアン・パバナン・ダダンの3つの名前はそれぞれの住む村の名のようでもあり、タラボアンの村を構成する集落を異なる3つの名前と呼ぶかのような記述でもある。同時に、タキリスではバサイ語を話すとも述べられており、トルビアワン人以外の2つのグループの人々も固有言語以外にバサイ系の言語を話すことができたという意味にも受け取れる。この部分の記述は曖昧であり、また、これらのグループの言語については情報がなく、本来バサイ語系だったのかも不明である。

やっとタラボアンに到達し情報は集めたものの、オランダ人は目的の金鉱のありかを確認することができなかった。西海岸における台湾情勢の変化によりオランダ人の東台湾における探金活動は、この後しばらく途絶え、それが再開されたのは1657年になってからであった。タラボアンの住人に対する具体的な情報が再び記録されたのはこの時のことである。

3. バルビヤーンのタラボアン探検

オランダ支配の末期にあたる1657年の夏、オランダ東インド会社は再び船をタラボアンに派遣し、念願であった金の採取場所を初めて見ることをタラボアンの首長から許された [Blussé & Everts 2010: 296-303]。これは同年7月から8月にかけて行われた助手のヤコブ・バルビヤーン (Jacob Balbiaen) 一行の旅によって達成されたものであった。一行は、宜蘭沿岸を経由して船で南へ下り、急峻な崖のある一帯(現在の清水断崖)を通り過ぎてタラボアンに到着し、一行はタラボアンの住民から歓待され、7月25日から8月16日までタラボアンに滞在したのである。

バルビヤーンはタラボアンの村には120戸の家があり(ハツパルトの報告とはかなり戸数が異なる)、5つの区域に分かれていて、それぞれに首長がおかれていたと記録している。バルビヤーン一行は、これらの区域を束ねる村全体の頭目のタリボカラウ (Tariboekalouw) と会見した。彼は村の近くの川の砂金の採れる場所にバルビヤーンらを初めて案内した。この場所はこれまでキマウリ人にさえも知らせたことはなかったものであった。さらにタリボカラウはオランダ人がタラボアンに駐在して金鉱を探すことを許可した [Blussé & Everts 2010: 296-303]。このバルビヤーンの訪問から、オランダ人の探金事業は新たな段階に入ったのであった。

その後、オランダ人は駐在員2名と兵士をタラボアンに送り込んだ。しかし金鉱探しは順調とはいえ

なかった。コールハースによる一般政務報告書史料集⁶⁾に収められた記録に基づいて、中村孝志はその経緯を紹介している。1658年、オランダはバルビヤーン、ならびにハルマン・ブルークマン (Harman Broeckman) に2人の有能な兵を付けてタラボアンに派遣し、その地で生活させた。またファン・デル・ミューレン (van der Meulen) を宜蘭平原のトロビアワン社に住ませ、皮革貿易を名目に金貿易の情報を得させようとした。ところが、同年12月、タラボアンではオランダ人の住宅からの失火のために隣家17軒が類焼被害に遭い、激怒した住民がオランダ人を殺害しようとした。しかし長老の1人の取りなしで損害を賠償することとなり、オランダ側は総額547ギルダーを支払うことになった [中村 1991: 205-206, Blussé & Everts 2010: 419]。そして、バルビヤーンの探検から4年後の1661年12月、オランダ東インド会社は鄭成功の軍に敗北し、ゼーランジャ城を明け渡して台湾からの撤退を決め、オランダによる38年間の台湾支配は終わりを告げるようになった [中村 1991: 205-206]。

オランダが台湾から撤退すると、東海岸の産金地とその住民に関する情報は次第に薄れていった。続く鄭氏政権も、また清朝も、この地方の砂金についての関心を持っていた [移川・馬淵 1974: 467] もの、探索はうまくはいかず、次第に砂金採取そのものが行われなくなったらしく [馬淵 1974: 494-495]、タラボアンの住民に関する記録は清朝時代を通じて次第に曖昧となった。

4. タツキリ渓流域の族群関係

山地原住民との敵対関係

ところで、オランダ人がタラボアンに到達した17世紀中葉には、まだタウサイ人とタロコ人はタツキリ渓周辺には到達していなかった。その一方で、オランダ時代の東インド会社の手紙や報告類などの史料の中には、当時、タツキリ渓とその付近に居住していた住民についての興味深い記述が含まれている。1645年のセザールによる探検や、1646年のハッパルトによる調査報告、1657年のバルビヤーンによるタラボアン訪問に伴う記録である。

1657年のバルビヤーンの訪問当時、タラボアンの村の周囲の高い山には Poulecheron と呼ばれる人々が住んでいた。彼らはタラボアンの村人にとっての唯一の敵であり、互いに首狩りを行っていた。

(タラボアン村の) 男たちは体格がよく、勇敢で強く、いつも槍とパラシ (蛮刀) を身に付けて武装している。小さい少年たちも弓矢を1日中持ち歩いており、自分たちで射る練習をしている。タラボアンは彼らの隣人の中に Poulecheron 人を除いて他には敵はいない。Poulecheron 人は彼らの周囲一帯を取り巻く山に住み、ときどき突然降りてきて、タラボアン人の首をとるのである。その仕返しとして、タラボアン人もまた Poulecheron 人を時々奇襲している。今日もある大きい区画の村人たちがひとつの Poulecheron 人の首をとったことをまだ祝っていた [Blussé & Everts 2010: 299]。

⁶⁾ 中村が引用したのは、コールハースが整理出版した General Missiven van Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie, Deel III: 1655-1674 (1968)。である。

タラボアン人の敵である Poulecheron 人は海岸に迫る高い山に村を作っていた。海路タラボアンに近づいたバルビヤーン一行は、タッキリ溪付近の断崖が続くあたりで、高い崖の頂上に Poulecheron 人の貯蔵庫があるのを見つけ、さらに船を漕いでいくと、タラボアンに近い地点で、Poulecheron 人の小さい村が身震いするほどの高さのところにあるのが確かに船から見えたことと記している [Blussé & Everts 2010: 297].

これは、それより 11 年前の 1646 年のハッパルトによる調査報告のなかで、山間奥地に棲むと記録されている Parrougearon 人に相当する人々であろう⁷⁾。それによると、Parrougearon 人は山のさまざまな個所に住んでおり、定住地を持っていない。そしてこれらの人々は宜蘭平原とタラボアンからの人々のほとんどにとっての敵である。Parrougearon 人は山を登ったり下りたりすることにきわめて長けており、それを一瞬のうちにやってのける。Parrougearon 人の既婚の女性は 4 本の歯を抜いており（上下それぞれの顎から 2 本ずつ）、その顔は、黒く塗るか、または皮膚を突いて穴をあけて染料を入れることによって飾られ、ほとんど彼らの額と鼻は素肌がみえないほどである。そのため彼らは一見すると猿のように見えるという。[Blussé & Everts 2006: 75].

これに関して中村孝志は、Parrougearon と呼ばれる人々が、口歯損傷、黥面、^{かくしゅ} 馘首などの風習の点からは原住民族セデックのうちのいわゆる木瓜蕃にあたるのではないかとしている。[中村 1991: 203] しかし、口歯損傷、黥面、馘首という習俗は、木瓜蕃と同一の集団であることを示す根拠として十分だとはいえないだろう。これらは他の台湾原住民族の間でも行われていた習俗であるからだ。

一方、1646 年の報告にある情報をこれまで知られている台湾原住民の習俗と比較すると、興味深いことが分かる。まず、Parrougearon 人の顔の文様についての記述だが、黒く塗るか、または皮膚を突いて穴をあけて染料を入れることによって飾る、としている [Blussé & Everts 2006: 75]。これは、顔を黒く塗る方法（この場合、塗料は落とせるのかもしれない）と、皮膚を突いて穴をあけて染料を入れること（これはいわゆる入れ墨であり、恒久的な消えない文様ができると考えられる）との 2 種類の方法があったことを示唆している。

また、既婚女性の額と鼻のほぼ全面に施されていたとされ、額と鼻の素肌が見えないほどであった [Blussé & Everts 2006: 75]。現在知られている台湾原住民の中には、額にイレズミを入れていたグループは複数あるが、鼻にイレズミをする人々はこれまで知られていない [宮内 1940, 何 1960]。

したがって、このイレズミの形式は、ほかの台湾原住民のどれとも異なっていたのである。男性にイレズミがあったかどうかこの記述からはわからないが、以上の点を考慮すると、Parrougearon 人女性の顔面のイレズミの形式は、鼻にイレズミを施していた点だけ取ってみても、これまで知られている台湾原住民のイレズミのどの形式とも異なり、独特のものであるようだ。

これに加えて、口歯損傷に関しては、既婚女性が上下 4 本の歯を抜くとされるが、抜歯が主に上顎の

⁷⁾ この住民の呼び名について、中村はパロヘアロン人と呼んでいるが、オランダ東インド会社の中にも二つ以上の異なる綴り方があり、いずれも同じ民族集団ではないかと思われるが、この民族についてはさらに稿を改めて論じる必要があることを考慮して、本稿では報告ごとにそれぞれ異なるローマ字表記のままとする。

2本ないし4本について行われた台湾原住民の例に対して、これもまた珍しい習俗であるといえるのである〔宮内 1940: 31-34, 37-40〕。

したがって、こうした習俗の比較からみると、Parrougearon 人がタロコ人や木瓜蕃の直接の祖先であったと考えるよりはむしろ、山岳地帯の住民ではあったが、タイヤル・セデック・タロコなどとはある程度系統の異なる人々であったと考えるべきであろう。

金の採取をめぐる族群関係

1646年の調査報告では、タラボアン人とともに砂金を採取していた言語の異なる人々について、これらの人々は、砂金の採取にあたって異なる態度を取っていたことが述べられている。それによると、

タラボアンからの人々とダダンからの人々は、浜辺や河口付近の砂浜で砂金を採取する。パバナンからの人々は、(彼らの慣習に従えば)それを1年のうちの3か月だけしか行わない。彼らは金を浜に下りて集めることはせず、(パバナン人だけは昔からそうする権利が特別に認められているので)川のもっと上流で採取するのだが、見つかる金はよりきめの粗い大きなもので、それらはそれほど大量には産出しない。また、タラボアンの住民は山の中に金を探しに入ることはない。というのは、これは彼らの慣習に反しているからであり、それと同時にかれらは Parrougearon 人たちを恐れているからでもある。Parrougearon 人はといえば、彼らであれ他のいかなる余所者であれ金を探しに来ることを許さないのである〔Blussé & Everts 2006: 75〕。

この記述からは、タラボアンからの人、ダダンからの人、パバナンからの人、という表現によって、それぞれが住んでいた集落の名前であったらしいとわかる。ただし、それらが近接して建てられ、集合体として一つの村を形成していたのかどうか、オランダ人の記録からははっきりしない。

ところで、パバナン人だけが上流で金の採取を行うことについて、中村孝志は、パバナンが Parrougearon 人と良好な関係にあったからなのではないかと推測しているが〔中村 1991: 202〕、報告のなかに「Parrougearon 人は、かれら(タラボアン人のこと)であれ他のいかなる余所者であれ金を探しに来ることを許さない」という記述があり、パバナン人だけが余所者扱いされていなかったと断定するだけの根拠はない。この記述によれば、パバナン人は慣習に従って川上で採取し、ダダン人とタラボアン村の住民は慣習に反するから上流には採取にいかない、という説明になっており⁸⁾、慣習の合意はトルビアワン人、パバナン人、ダダン人の間で成り立っていたように思われる。そして、Parrougearon 人はこうした慣習的合意の外にいるように読み取れる。つまり、トルビアワン人、ダダン人、パバナン人の間の合意として、パバナン人だけは昔から川上での金の採取の権利が特別に認められていた代わりに浜辺での採集はせず、逆に、トルビアワン人とダダン人は河口付近の川辺や海浜での

⁸⁾ 中村孝志は、同じ VOC1218 の記述について、川下だけでなく川上でも採取すると述べている〔中村 1949: 313, 1991: 200〕が、誤読であると思われる。

金の採集権利はあったが、川上の流域での採取の権利はない、という合意が出来上がっていたと考えられる。

しかし実際には、川上では Parrougearon 人が金の採取をさせないように妨害していたのであり、その地域での作業は生命の危険があった。それをパバナン人はあえて川の上流で採取を行い、しかもそれが可能であったらしい。なぜパバナン人だけが、危険な川上で採取作業ができたのだろうか？

この点について考えるにあたり、1645年のセザールの探検についての報告中に、猿のような頭を持つ人々の村がタラボアンから徒歩で7時間ほど山の中に入ったところにある、という記述 [Blussé & Everts 2000: 30] がある一方で、ハッパルトの調査報告には Parrougearon 人は定住地を持たない人々である [Blussé & Everts 2006: 75]、という一見矛盾する記述があることに注目したい。定住地を持たないということは、彼らの村があっても、恒久的な村ではなく、その住民が移動することもしばしばあった、という意味であろうか。山の中の様々なところに住んでいるという記述からは、多数の人口を擁する集住形態ではなく、散らばって生活している様子がうかがえる。

Parrougearon 人はタツキリ溪に近い山の中に集落を作っていたとしても、定住に足る食料が確保できず、季節によって採集植物や狩猟の獲物を求めて山岳地帯の広範囲の領域を移動するという生活が行われていたのだろうか。そのような生活形態であれば、彼らがタツキリ溪付近から離れる特定の時期があったかもしれない。決まった時期に Parrougearon 人がいなくなるのであれば、生命を脅かされることなく上流で金の採取が可能だろう。しかしながら、Parrougearon 人の生活形態については推測の域を出ないのである。

とりあえずいえることは、トルビアワン人からみてダダン人、パバナン人は敵対関係ではなく、相互に金の採取のための専有領域を分けていたとみることができる。パバナン人は河口よりも上流の地点を金の採取場所とし、トルビアワン人とダダン人は河口の砂浜を共同の採取場所としていた。つまり、金の採取の縄張りは大きく二つに分かれていたのである。こうした縄張りの違いにはどのような意味があったのだろうか？

オランダ史料によると、パバナン人の採取する金は、採集量は少ないが、より粒の粗いものであったという [Blussé & Everts 2006: 75,]⁹⁾。パバナン人は、より金鉱に近く大粒の金が採れる場所を知っていたのでそこを縄張りとし、一方のダダン人とトルビアワン人は、粒の細かい砂金が集められる場所を分け合っていたとみられる。ハッパルトの報告に、パバナン人は「金を浜で集めることはせず、(パバナンだけは昔からそのようにする権利が特別に認められているので)川のさらに上流で採取する」 [Blussé & Everts 2006: 75,]、という説明があることを考えると、パバナン人の方がこの地における金の採取に関する慣習的な占有権を持っていたように読み取れるのである。このような違いは、金を採取する各集団のタツキリ溪への移住時期の違いに対応するのではないだろうか。早くからこの地域に来て金の採取を始めたグループが上流の採集場所を熟知し、占有していたのかもしれない。

⁹⁾ 中村孝志 [中村 1949: 313, 1991: 200] によるオランダ史料のこの部分に関する記述では、大粒のものを多量に産するとしているが、史料当該部分 (VOC 1218, 521) の誤読と思われる。

ところで、仮にパバナン人には金の採取場所についての特別な権利があったとしても、オランダ文献に現れてくる限りでは、オランダ人との交渉やバサイ人との金や商品の取引においては、トルビアワン人が常に前面に出てきており、3つの言語集団の中ではトルビアワン人が主導権を持っていたように読み取れる。方言差はあれ、母語の十分通じるバサイ人商人との取引関係が結ばれていたことによって、沿岸交易に関しては、トルビアワン人が三者の中で優位に立てたのかもしれない。

商売をめぐる族群関係

ところで、同じ系統の言語を話すトルビアワン人とバサイ人はどのような関係にあったのだろうか。タラボアンに住むトルビアワン人と直接接触したバルビヤーンは、キマウリから来たバサイ人のことをタラボアンの住民たちはあまり高く評価していないと報告している。なぜなら、彼らは船で運んでくる品物を十倍の値段で売りつけるからであるという [Blussé & Everts 2010: 304]。また、タラボアンの首長タリボカラウがバルビヤーンに述べた言葉からも、彼らのバサイ人の商売の方法への抵抗感が感じられる。タリボカラウは、会社のオランダ人たちがこんなにも長い間、誰ひとり訪問してこなかったことや、バサイ人だけが毎年やってきて、彼らが会社の代理として金をそれ以外の商品と交換したことは驚きだったと述べ、「もしオランダ人自身がここに来るのであればもっといいことであり、自分たちにとってとても好ましいことである」と述べたのである [Blussé & Everts 2010: 300]。

1645年にセザールがタラボアンを探検してから10年以上の間、オランダ人はタラボアンを訪れる機会がなかった。その理由は、スペインが去った後の西部地域の平定と支配の確立に忙しく、金鉱探索に出かける余裕がなかったからである。その間、バサイ人が会社の代理として物々交換にやって来たタリボカラウが述べているのは、バサイ人たちが会社の名前を使って有利に商売を進めていたことを示唆している。このやり方は、タラボアンの住民に少なからず不満を感じさせるものであったようだ。

バサイ人の商売のやり方は宜蘭のクヴァラン人に対しても同様だったらしい。宜蘭平原からのバルビヤーンの報告には、クヴァラン人たちはいまやバサイ人たちがオランダ東インド会社の名前を使って彼らを馬鹿にしてきたことを認識するに至った、と述べられている。そして、彼らはバルビヤーンに、今後会社から誰かが来るときには、彼らが会社の利益のために来ているのだというしるしを持ってきてほしいと要求したのである [Blussé & Everts 2010: 360-361]。

これらのことからみて、タラボアンの首長タリボカラウがバサイ人にも知らせたことのない金の採取場所にバルビヤーンを案内した理由は、バサイ人を介さずに直接取引をする商売相手としてオランダ人との関係を進めようとしたからだったと考えられる。

一方、バサイ人から見ると、オランダ人が宜蘭平野やタラボアンに到達して住民と直接交易を始めれば、自分たちの既存の利益が失われることになる。生業の中でも商売の比重が大きかったバサイ人にとっては、オランダ人は競争相手であったということができよう。しかもオランダ人とバサイ人は対等な関係ではなく、バサイ人がオランダ人の支配に服する関係にあった。そこで、オランダ人に協力しつつも会社の目の届かないところで、会社の名前を利用してバサイ人は巧みに商売を展開していたので

あった。

1657年、コイエット長官への公文書の中で、商務員ピーテル・ボーンはバルビヤーンの報告を受けて次のように述べている。

（バルビヤーン助手が8月17日に基隆に戻ってきて、宜蘭平原とタラボアンの人々が会社と同盟関係を結ぶ意欲があることを報告した。その結果明らかになったのは、）抜け目のないキマウリのバサイ人が、これまでの間、絶えずこれらの未開拓地の人々を誹謗中傷し続けてきたことである。そのために我々はそれらの（未開の地の）人々に対して疑ぐり深くなってしまっていた。バサイ人たちは、もしオランダ人がその地へ行けば攻撃されて殺されるだろうと常に語っていたのだが、じつはこれは逆だったことがわかった。殺されるどころか、彼ら（バルビヤーンたち）は歓待を受けたのだ。一方で、キマウリ人たちのこの主張は、我々が思うに、カバラン平原とタラボアンの人々から我々オランダ人を遠ざけようとする意図に基づいており、榮えある会社の利益のために行動しているという口実のもとに、交易を彼らだけで独り占めしようとする策略だったのである。[Blussé & Everts 2010: 364].

この文書の記述は、オランダ人とバサイ人の支配 - 被支配関係という枠組みのもとで、バサイ人がオランダ人の介入を言葉巧みに阻みながら他の原住民との商取引関係を進めていたこと、そしてそのことにオランダ人が気付いたことを示している。

一方、タラボアン人と宜蘭のクヴァラン人との商取引における関係はどうであったかという点、1646年のハッパルトの報告には取引の内容や交換レートについて次のように記されている。

毎年彼ら（タラボアン人）はカバラン（宜蘭平原）に航海し、カバランの人々はタキリスに航海して、お互いに物々交換を行っている。通例としてタラボアン村の人々は彼らの砂金と、スペインの銀、大きな鉄鍋、中国の鉄と交換している。10本の小さい鉄棒と交換で1/4レアルの重さの砂金を得ることができる。しかし鉄が多量にあれば、交換レートは3/16レアルとなる。ちょうどバサイ人がスペイン銀を買う時のカスティリア人（スペイン人）時代の慣習と同じである。彼らが知る限り、タキリス人たちはカバランにおいては、1粒のスペイン銀に対してふつう8レアルの砂金を支払うが、タキリスの人々が彼らの村にいるときはいつも6または7レアルで支払わなければならない。しかし、彼らはいたい金のかげらや薄くたたいた金で米、小魚、カンガン布、銅製の腕輪などの交換商品と交換している。[Blussé & Everts 2006: 75]

クヴァラン人との取引では、取引する地点やそこでの需給量の差により異なる価格設定がなされており、タラボアン人・クヴァラン人とも商売のやり方を身につけていたということがわかる。

ところで、バルビヤーンの探検報告は、タラボアンにおけるバサイ人商人とタラボアン人の取引関係

について、次のように述べている。

27 日の朝、のろまで怠け者だが貪欲なバサイ人たちが早起きして自分たちの商売に忙しくしていた。彼らはカバラン（宜蘭平原）にいるときほどには商売に多くの気遣いをしていなかった。なぜなら、この地の人々は、かの地の人々ほど信用できない相手ではなかったからだ [Blussé & Everts 2010: 301].

バルビヤーンの観察では、バサイ人から見て、タラボアンの住民はクヴァラン人と比べてそれほど気を遣う必要もなく、相対的に信用しやすい相手だった、ということになるのだが、それはタラボアン住民と言語が通じ合うことによるものなのだろうか？それともクヴァラン人が相当程度抜け目のない取引相手だったからなのだろうか？オランダ人の目を通して見た原住民間の関係性の差異は、そこに介入しようとしていたオランダ人自身との関係も含めて、興味深い内容を示している。

以上、オランダ史料の記述の一部を手掛かりに、タラボアン人とその周辺の諸族群の関わりについてその大まかな輪郭を描くことに努めた。オランダ東インド会社によるタラボアン探検自体は数えるほどしかないが、その記録の中には、原住民グループの間に金の採取に関する協調関係や敵対関係が存在したこと、また、原住民同士およびオランダ人と原住民との間に、商売をめぐる利害関係のせめぎ合いが存在したことなどを読み取ることができるのである。

IV. 18 世紀における族群関係

1. タロコ人・タウサイ人と Parrougearon 人

オランダ人が訪れてからおよそ百年後の 18 世紀半ば、中央山脈から東に移動してきたタロコ人が、タツキリ溪の下流域にまで進出してタラボアンの先住の人々を激しく攻撃し、タツキリ溪から追い出したことは、様々な口碑によって知られている。そして、その間に、Parrougearon (Poulecheron) 人はタツキリ溪流域の高山地帯からいなくなり、タロコ人にとって代わられていたのである。

それではタツキリ溪流域の諸民族はどのような経緯でその地域から移動したのだろうか？まず、日本統治時代に集められた口碑に基づく研究から、18 世紀頃にタツキリ溪上流で起こった出来事について見ていこう。

『高砂族系統所属の研究』には、タツキリ溪流域の「山里」(Bulexengun; プレヒェゲン¹⁰⁾) という場所が表れる [台北帝国大学土俗人種学教室 1935: 83-84]。この土地は耕地を開くのに適した場所であつたらしい。(この地名が発音の特徴から先住者の Parrougearon 人とのかわりを想起させることにつ

¹⁰⁾ 言語学者の土田滋教授から、このカタカナ表記は正しくは「プレヘゲン」と書くべきとのご指摘をいただいたが、本稿では『系統所属』原文の書き方をそのまま呈示してある。

いては山田仁史教授からのご教示による。）

『系統所属』のタロコ人の移動に関する口碑によると、まずタロコのシーパオ社が、故地のタロコ - タロワンからブンキアンに移ってきて、ブレヒェゲンという場所に耕地を開き、少し遅れてタウサイ人もブンキアンに移住して来た。タロコ人とタウサイ人は、はじめは仲が良かったがのちには敵対関係になった。両者は反目するようになり、ついにタウサイ人による殺害事件が起こったため、祖先たちはシーパオ社の地に退いた〔台北帝国大学土俗人種学教室 1935: 83-84〕。

一方、同じくタロコに属するトブラ社の祖先はタロコ - タロワンからブレヒェゲンに来たところ、これよりやや遅れてタウサイ人が同じくブレヒェゲンに移ってきた。はじめ両者はその地で一緒に住んでいたが、タウサイ人がタロコ人の首をとったので、トブラ社の祖先はブンキアンに退いた。このようなタウサイ人の圧迫を受けてタロコ人がブレヒェゲンの耕作地を放棄したという話はタウサイ人の間にも伝えられているが、その伝承はタロコ側のシーパオ社、トブラ両社の口碑とは反対のものである。つまり、この地が元来タウサイの地であったにもかかわらず、タロコが勝手に開墾したから追い払ったのだ、と述べているのである〔台北帝国大学土俗人種学教室 1935: 84〕。

タロコ、タウサイなどの原住民グループがタツキリ渓流域の山岳地帯に入ってきたことにより、ブレヒェゲンと呼ばれた土地をめぐるこれらの人々の抗争が激化したとみることができるのであるが、それらの伝承は先住民 Parrougearon 人との抗争については触れておらず、もっぱらタロコとタウサイの土地争いという説明になっている。そのプロセスは『系統所属』が概説する移住の経緯によると、奇萊主山北峰を越えて移住してきたトロコ蕃の分派に属するタロコ蕃は、最初タツキリ溪の沿岸近くに若干の蕃社を建設し、漸次増殖するにつれて幾多の分社を生じ、その一部はついにもっと南の木瓜渓流域方面に進出するにいたったのであった〔台北帝国大学土俗人種学教室 1935: 83〕。

馬淵東一は、アタヤル・タロコの大移動の開始時期を18世紀初頭あるいは中期と推定、タロコやタウサイがタツキリ流域に来住したのは18世紀の半ば近くと推定し、それに先立って彼らの狩猟活動ならびに首狩り活動がこの流域の住民の脅威となり始めていたと推定している〔馬淵 1974: 497〕。だとすれば、タロコ・タウサイの狩猟活動が次第に広範囲に広がり始めたころ、まずかれらと最初に土地を争ったのは、タツキリ溪奥地の山岳地帯に住む Parrougearon 人であったはずである。そしておそらく18世紀の半ばごろまでに入れ替わりが起こったと推定される。

以上、これまで分かっていることを時間的経緯に従って整理すれば、Parrougearon 人がタツキリ溪付近の山地からいなくなり、タロコ人とタウサイ人がここの土地を争い、やがてタロコ人がタツキリ溪下流域まで勢力を伸ばしてタラボアンのトルビアワン人、パバナン人、ダダン人を攻撃し、ついには彼らをタツキリ溪河口付近から追い出すに至ったということになるだろう。（図2参照）

2. タロコ人の圧迫とトルビアワン人の移動

18世紀半ばごろにタツキリ溪から北方に移動したと推定されるトルビアワン人とその周辺族群の動きについては、すでに宜蘭の住民の口頭伝承にもとづく検討がなされている。日本時代になって採集さ

れた宜蘭のトルビアワン人の複数の伝承によると、彼らの祖先は、タッキリ溪河口あたりに居住していたが、タロコ人の圧力を受け、海路または海岸沿いに宜蘭東方海岸に移動したという〔馬淵 1974: 473-475, 496-497〕。

馬淵はこの時期のトルビアワン人すなわちタラボアンの住民の移動の原因について、その時代の台湾全体の民族の移動の波と関連づけて考察している。それによると、トルビアワン人の北方移動はタイヤル、セデックやブヌンなどの族群の大移動と同じ波動に属するタロコ人の移動が引き起こしたものであったという〔馬淵 1974: 473-475〕。

このようなタロコ人の移動を引き起こした山地原住民の大移動の波が18世紀半ばごろに発生した理由について、馬淵は次のように考察している。山地の原住民の移動の波が起こるより先に、台湾の西部平原では大陸から来た漢人による平原部の開拓が進むという出来事が起こっていた。開拓に伴って森林が伐採されて水田になるにつれて、原住民の狩猟の対象であった鹿の捕獲量が急減したと考えられるが、その一方で、鹿の袋角および鹿鞭は、漢方薬の強壮剤原料として漢人側の需要が大きく、高価であったことから、漢人との交易のために原住民によって鹿が捕獲され続けた。より多くの鹿を捕獲するため、原住民は漢人から鉄砲を手に入れることが必要になった。そこで鹿の袋角や鹿鞭を含む猟産物及び林産物と引き換えに、鉄砲その他の漢人の製品が山地民の間に流入した。〔馬淵 1974: 496-497〕。

他方、減りつつある猟の獲物を増やすため、原住民は猟場を拡張することが必要になった。アタヤル系（タイヤル・セデック・タロコを含む）の民族やブヌン族などの大移動に関する口頭伝承について調査した馬淵は、彼らの移住の仕方について、まず遠隔地に猟小屋が作られ、やがてそれが耕作小屋にまで発展した後で、そこに本格的な移住と部落づくりが行われたという話が多いことを指摘している〔馬淵 1974: 496-497〕。山地原住民の移動は、このような猟場の拡張と結びついたものであったようだ。

のみならず、鉄砲の使用は、ほとんど台湾全体の諸民族の間で行われていた首狩りに、画期的な戦術変革をもたらすことになった。銃という新兵器を持ったアタヤル族やブヌン族の襲撃を受けて、東部平地のアミ族村落が壊滅四散した事例は少なからずあったことから、馬淵はタッキリ流域のトルビアワン人も同様の状況におかれたのではないかと述べている。そして、18世紀の半ば近くにタロコやタウサイなどの山地原住民グループがタッキリ流域に来住したのに先立って、タロコ人の狩猟活動が同流域の住民に脅威になり始めていたことは十分考えられるとしている〔馬淵 1974: 496-497〕。

3. 宜蘭平原におけるトルビアワン人村落の形成

宜蘭におけるトルビアワン人の村落形成は、18世紀におけるタッキリ溪からの移住時期よりもかなり早かったと考えられる〔Borao 2001: 164-165〕。移川・馬淵も、宜蘭平原における哆囉美遠社の形成は1650年よりも前であると述べている〔移川・馬淵 1974: 475〕。また、詹素娟もクヴァラン人の間に伝わるサナサイからの移住伝承について取り上げ、トルビアワン人が宜蘭に入った時期は、16、17世紀よりも前であったことを結論付けている〔詹 1995: 73〕。

そして、馬淵東一は、18世紀にタッキリ溪から最後に引き揚げたトロブアン人の多くは宜蘭の哆囉

美遠社に合流したらしいと述べている [馬淵 1974: 425-426]。一方、詹素娟が集成検討したトルビアワン人の口述は、それぞれタロコ人に圧迫されて宜蘭へ移住してきた自分たちが哆囉美遠社を建てたとか、哆囉美遠社の祖先となったのだと述べており、別社に合流したとか、同じトルビアワン人の仲間を頼って移住したという話は見当たらない。ただクヴァラン人の方が先に宜蘭へ移住し、自分たちは少し後になって宜蘭へやってきたというのがトルビアワン人の移住に共通するといえる話の筋である [詹 1995: 58-61]。つまり、17世紀初めから存在していた宜蘭と花蓮の両方のトルビアワン人の村落（哆囉美遠社とタラボアン）の間の関係が明確には伝承されていないのである [詹 1995: 73]。

この点について、オランダ人の1646年の記録によれば、17世紀にはタッキリ溪のタラボアン社と、宜蘭の住民（ただし哆囉美遠社人かどうかは明確でない）との間には、季節風を利用して相互に船によって訪問しあう交易関係が毎年行われていた [Blussé & Everts 2006: 75]。オランダ人の記録が途絶えてからはその後の情報が残されていないが、こうした交易関係が続いていたことを前提とするならば、タラボアンと宜蘭の間の往来と交易のつながりを頼って、タラボアンの人々は宜蘭のトルビアワン社に合流するのは比較的容易であったに違いない。ただし詹素娟の指摘するように、哆囉美遠社建設の経緯と、それに関する伝承の偏りについては、まだ十分な説明ができたとは言えないのである。

4. マッカオリンの伝説とカウカウ社の起源

4.1. Parrougearon 人とタロコ人の入れ替わり

それでは、タッキリ溪上流にいたテラボアン人の敵 Parrougearon 人はいつ頃どのようにしてタロコ人と入れ替わり、そして Parrougearon 人はその後どこへ行ったのか？この問題について、日本統治時代に収集されたマッカオリン (Mək-qaulin) の伝説と、宜蘭の猴々 (カウカウ) 社の起源に関する伝承をもとにした先行研究を参照してみよう。

馬淵東一は、タロコ・タウサイなどのセデク群が中央山脈を越えて東進した頃まで、タッキリ渓流域やその河口から北にかけて分布していた先住民について触れている。馬淵によれば、これは、セデク語で Mək-qaulin と呼ばれた先住民で、この人々に関する口碑がさまざまにあるが、結局、彼らはセデク群の進出に押され、陸路または海路で北方に去ったということに帰着する。しかも、南澳蕃の口碑を参照して行方をたどれば、クヴァラン族分布の最東南端にあった猴々社 (Qauqaut) にほかならないことになる。猴々社人自らも祖先がアタヤル族の圧迫で南澳蕃領域の東部山地（タッキリ渓流域に関して記憶なし）から蘇澳を経由して猴々に来住したこと、アタヤル族が彼らを Qaulin または Qau-qaulin と呼ぶことを語っている。この称呼は Mək-qaulin にほかならない、と馬淵は述べている [馬淵 1974: 300]。

また、クヴァラン族の住む花蓮県豊浜郷の新社で馬淵が聞き書きした口碑によれば、「トルビアワン社の祖先も猴々社も古くはタッキリ方面に居て、等しくアタヤル族の圧迫を受け其処を去つたのであるが、両社は互いに言語を異にした [馬淵 1974: 429]」という。しかも、猴々社で自ら伝えているのは、その祖先が山地住民で、好んで傾斜地を耕すとともに盛んに狩猟をおこない、獵の獲物をクヴァラン族

の塩などと交易したということである [馬淵 1974: 429].

馬淵はこれらを踏まえて次のように推測している。「タイヤル族タロコ群, タウサイ群は 2, 3 百年前, 中央山脈西側の原居地を遠く離れはじめ, 中央山脈を通過して東台湾に移ってきたとき, 今日のタッキリ溪の中, 下流域で, もともとマッカオリンと呼ばれる一群の人々がそこに住んでいた. 彼らはタイヤル人の首狩行為の圧力を受けて, タッキリ溪を越えて, 海岸沿いに北に移住し発展した. 中間には大濁水, 大南澳, 蘇澳一帯があり, しばらくの間ずつそこにとどまった. タイヤル族の脅威を避けることができなくなり, 最後は大南澳の浪速に移住した [馬淵 1931: 464]」。これが宜蘭の猴々社の建設に至る経緯である。

一方, 言語学者の研究によれば, カウカウ語の残存資料はきわめて少なく, ただ 1 から 10 までの数字 10 個だけであるが, この純粹の言語資料から見て, カウカウの言語はミクロネシア語の特徴と共通する一方, これ以外の原住民諸語には同様の特徴は見られないという [李壬癸 1992: 227]。つまり, カウカウの言語は台湾のオーストロネシア語のどれとも異なるものであったらしい。

4.2. カウカウ社とマッカオリン人の関係

タッキリ溪を接点としたトルビアワン人, タロコ人, マッカオリン人の関係についてはその後も研究者の検討課題となってきた。そのなかで, 詹素娟は, 宜蘭の猴々社の起源をタッキリ方面から移動してきたマッカオリン人と考えられるかどうか検討している。まず, 時期であるが, 18 世紀初頭の 1710 ~ 1720 年の間にすでに猴々社の存在があり, マッカオリン人はすでにこの時期に宜蘭平原に近いところで集落を形成していたと考えている。およそ 17 ~ 18 世紀初めの 4, 50 年間のことである。そして, カウカウ人と, タロコ人, トルビアワン人との間の民族的な親縁関係について詹素娟はさまざまな口碑を比較し, さらに言語学, 考古学上の研究結果から総合して, マッカオリン人はクヴァラン人やトルビアワン人と種族来源上の関係はありそうだが, 独特の言語, 風俗, 文化を持った特殊な族群であると考察した [詹 1995: 72]。

カウカウ人の前身は Mək-qaulin であるらしいとしても, Mək-qaulin と Parrougearon 人の関係及び彼らの民族的系統については, さらに検討を要すると思われる。もし, オランダ史料に登場する Parrougearon 人が, 口碑では Mək-qaulin と呼ばれる人々であったとするならば, これまで考察してきたように, わずかな根拠ではあるが, 言語の独自性や, イレズミの様式や抜歯の形式などの特殊性, そして山中での定住地を持たない生活形態などから考えて, かれらはクヴァラン人, トルビアワン人とは全く異なる高山地帯を住处とする原住民であり, なおかつアヤル・セデック・タロコをはじめ, そのほかの台湾の山地に住む住民のどれとも異なる特徴を持つ族群であったと考えられるからである。

V. 残された課題

本稿では, 17 ~ 18 世紀における東海岸の原住民諸族群の歴史的相互関係を明らかにすることを目的

に、オランダ資料、口碑などからタラボアン村のトルビアワン人の歴史を大まかにたどってきた。タラボアン人の周囲に展開された族群関係は、同じ系統の言語を話すバサイ人、言語系統の異なる宜蘭平原のクヴァラン人、同じく宜蘭平原のトルビアワン社の同族人、言語系統不明のパバナン人・ダダン人、Parrougearon人と呼ばれた山地住民、及びタロコ人との関係であった。タラボアンでは、砂金をおもな交易品として、食料や鉄、布など主要な生活財を手に入れていたことから、タラボアン人の生業活動にとっては、交易関係にある人々、とくに多様な交換品を持ち込んだキマウリのバサイ人との関係が重要な軸となっていた。

一方、山地住民とは敵対関係があり、また、パバナン人、ダダン人との砂金採取のための棲み分け関係があった。そこに、統治の受け入れと交易を表向き理由として接近してきたオランダ東インド会社の思惑が加わったのである。

これらの人々の17世紀以降の移住や民族の盛衰を含む歴史的な動向には、まだ解明されていない部分も多くあり、オランダ文献を手掛かりに引き続き検討すべき点が多く残されている。

また、トルビアワン人と周辺の各グループの動きは、タツキリ渓流域だけでなく、広く中央山岳地帯から西海岸までに及ぶ原住民同士の相互関係全体に影響を受けていること注意する必要がある。タロコ人の攻撃の激化によりトルビアワン人がタツキリ溪から宜蘭平野に移住を迫られた背景には、中国大陸から台湾西部平地帯に流入してきた漢人開拓民の急激な増加による自然環境の激変、漢人との交易の比重の拡大ともなる山地への多様な商品の流入と技術変革、鹿をはじめとする山地の産物の商品価値の増大とこれらの資源の乱獲による減少など、経済生活全般にかかわる要因があったとされる〔馬淵 1974: 496-497〕。

これらの要因が18世紀における原住民社会の少なからぬ変容をもたらし、族群関係における力の変化を生み出したに違いない。そして、ついには大きな民族移動や民族集団の消長へとつながってきたという指摘は的を射ていると思われる。しかし、漢人の開拓がまだ本格的に展開される前の17世紀の段階についての状況を説明するには、もう少し異なる視点が必要であると筆者は考える。タツキリ溪周辺の族群関係から見れば、17世紀初頭から18世紀半ばにかけて、族群間における生活領域をめぐる争いが時代を追うごとに高まっていったように見えるのであるが、その原因について検討するうえで、この時代における諸環境の変化とその影響を踏まえてみることもこれからの課題としたい。今後は、引き続き歴史的資料を通じて、17世紀・18世紀に東海岸諸民族がどのような相互関係を展開していたのかを観察し、それらが台湾原住民の各集団の盛衰にどのように結びついていったのか、様々な角度からの検討を加えて考察を深めていきたいと考えている。

* 本稿を執筆するにあたり、山本芳美教授からイレズミ研究に関するご教示をいただいた。また、土田滋教授からは現地語のカタカナ表記について、岡本奈緒子教授、Marjolijn Venema氏からはオラン

ダ語の発音に関するご教示をいただいた。これらの皆様にこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。また、シンポジウムでの発表の場を提供して下さった厦門大学人類学・民族学系の董建輝教授にも厚く御礼申し上げる次第である。

参考・引用文献（日本語読みアイウエオ順）

《和文・漢文》

伊能嘉矩

1898 「宜蘭方面における平埔蕃の実査」『東京人類学会雑誌』147：345-350.

伊能嘉矩著・森口恒一編

1998 『伊能嘉矩 蕃語調査手冊』（台湾原住民資料叢書 3）台北：南天書局.

移川子之蔵・馬淵東一

1974 「マッカー博士の布教せる噶瑪蘭平埔族に就いて」『馬淵東一著作集』2：467-483
(初出：1939)，東京：社会思想社.

翁佳音

1995 「西班牙、荷蘭文献選録」黄美英主編『凱達格蘭族書目彙編』（凱達格蘭族文献彙編《第一冊》）：103-127，
板橋：台北県立文化中心.

何廷瑞

1960 「臺灣土著諸族文身習俗之研究」『考古人類學刊』第 15・16 期合刊：1-48.

清水純

2004 「新年に現われる民族——トロブアン・アイデンティティの残存と発現」『研究紀要』46：21-53，東京：
日本大学経済学部

2014 『画像が語る台湾原住民の歴史と文化』東京：風響社.

詹素娟

1995 「宜蘭平原噶瑪蘭族之来源、分布與遷徙——以哆囉美遠社、猴猴社為中心之研究」潘英海・詹素娟主編『平埔研究論文集』41-76，台北：中央研究院台湾史研究所籌備處.

台北帝国大学土俗人種学研究室

1935 『台湾高砂族系統所属の研究』刀工書院（復刻版，1988，東京：凱風社，1996 台北：南天書局）.

中村孝志

1949 「台湾におけるオランダ人の探金事業 —— 一七世紀台湾の一研究」『天理大学学報』1 (1)：271-324

1991 「オランダ人の台湾探金事業再論」『天理大学学報』43 (1)：197-211.

馬淵東一

1974 『馬淵東一著作集』第 2 卷，東京：社会思想社.

村上直次郎訳注・中村孝志校注

1972 『バタヴィア城日誌』第 2 卷，東京：平凡社.

宮内悦蔵

1940 「所謂台湾蕃族の身体変工」『人類学・先史学講座 19』1-45，雄山閣出版.

李壬癸

1992 〈台湾平埔族的種類及其相互關係〉，《台湾風物》42 (1)：238～211.

劉益昌

1990 〈花蓮縣秀林鄉崇德遺址〉,《田野考古》1(1):37-50.

劉益昌主編

2007 『原住民文化與國家公園永續經營之研究：太魯閣立霧溪流域人文活動之研究』太魯閣國家公園管理處委託研究報告（未刊行）。

2009 『立霧溪流域人文發展之研究（二）』太魯閣國家公園管理處委託研究報告（未刊行）。

著者不明

1932 「タツキリより出土の金製土俗品」『南方土俗』2-1:101.

1937 「タツキリ遺跡の調査」『南方土俗』4-3:177.

《英文》

Blussé & Everts

1999 *The Formosan Encounter. Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources*, Vol.I:1623-35, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

2000 *The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources*, Vol. II: 1636-1645, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

2006 *The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources*, Vol.III: 1646-1654, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

2010 *The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources*, Vol.IV: 1655-1668, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

Borao, Jose Eugenino

2001 *Spaniards in Taiwan*, vol.I: 1582-1641, SMC Publishing Inc, Taipei.

Moriguchi, Tsunekazu

1991 'Asai's Basai Vocabulary', in *Linguistic Materials of The Formosan Sinicized Populations I: Siraya and Basai*, pp.195-257, University of Tokyo Department of Linguistics, 1989-1990年度科研費補助金（A）研究成果報告書

Tsuchida Shigeru

1980 Taiwan (Formosa), in *Language Atlas of the Pacific Area*, P.30 ed. By Stephan Wurm & Shiro Hattori, Australian Academy of the Humanities, in collaboration with the Japan Academy.

